

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2026



所 属： 人文学部 人文学科 児童教育専攻

名 前： 岡村 健太

作成日：2026年5月11日

教員氏名：岡村 健太

所属：人文学部 人文学科 児童教育専攻

1. はじめに

筆者は2021年4月に九州ルーテル学院大学人文学部に講師として着任し、2024年度から人文学科児童教育専攻准教授として勤めている。専門は教育哲学、特にG.H.ミードの社会的自我論の考え方を教育学へ援用する研究を行っている。

2. 教育の責任

2026年度は年間12科目（主担当出ない科目も含む）の授業を担当予定であり、加えて教員採用試験対策講座も担当している。

(1) 授業科目の担当

2026年度は以下の科目を担当予定である。

科目名	開講学期	履修者数（26年度）	備考
教育原論【幼小中高】	前期	107	教職科目
道德教育の理論と実践【小】	後期	48	教職科目
道德教育の理論と実践【中】	後期	20	教職科目
カリキュラム論【小中高】	前期	69	教職科目
教師力演習	前期	76	専門教育科目
フレッシュマン・ゼミⅠ	前期	64	共通教育科目
フレッシュマン・ゼミⅡ	前期	64	共通教育科目
小学校教育実習Ⅰ	通年	41	教職科目
小学校教育実習Ⅱ	後期	41	教職科目
哲学	後期	44	共通教育科目
特別研究	後期	不明	専門教育科目
卒業研究	通年	4	専門教育科目

■ 主要授業科目

教育原論

本授業では教育に関する基礎的な学びとして、教育の基本的概念とは何か、教育はどのような歴史を経たか、また歴史の中でどのような思想が生まれたか、以上の3点を中心に扱う。特に、子ども・教師・家庭・学校・社会といった、教育を構成している諸要素の関係性・変遷・課題について学んでいく。それらの学びを通して、教育は何を目指すのか、どのような教育が「よい」といえるのかという、教育に関する理念につ

いて考える。

カリキュラム論

本授業では、教員として必要な教育課程に関する実践的知識を理解する為、教育課程に関する理論・歴史、学習指導要領、教育課程を取り巻く諸問題等について学ぶ。授業内では、ディスカッション等を交えながら主体的な理解を深めると共に、アクティブラーニングをはじめとする近年の教育課程編成における先進的取り組みについて学ぶ。

道徳教育の理論と実践

本授業では道徳教育に関して、どの様な歴史をもつか、現在が抱える課題は何か、どの様な諸理論が生かされているか、どの様に学習指導要領で扱われているか、以上の4点を中心に学ぶ。その上で、指導計画や学習指導案について学び、模擬授業実践と振り返りによる授業改善の実践を行う。

■ 非常勤講師

教職実践演習（中・高）：早稲田大学（2020-2022）

生活科教育：熊本大学（2024）

教育課程論：熊本大学（2025-2026）

(2) 教育組織運営

2023年度より、児童教育専攻主任を務めている。その他、研究推進委員会・地域連携推進委員会・図書館委員会の委員を務めている。

3. 教育の理念

近年我々は、インターネットの普及に伴い、ともすれば一問一答型の「知っているか否か」の思考に陥り易い社会の中で暮らしている。反射的な思考を繰り返すだけでは、今後ますますAI等に人間の役割が移行していくことになるだろう。述べるまでもなく、単純な処理等においてはAI等の方が人間よりも優れている側面が多い。これからの社会を担う人材を育成する上で、私は教育哲学の観点から、「他者と協働的に事象を吟味することを通じて学び続ける意義を伝える」ことを目指し、教育を行う。上記理念の詳細については、語順等を入れ替えながら、下記に示す。

(1)理念1 問いを立てる機会を設ける

事象を吟味する為には、事象を鵜呑みにせず、積極的に深く思考する態度を育てていかなければならない。その為にはまず、問いを立てることを学生に意識させる為、その機会を積極的に設けていきたい。

(2)理念2 他者と協働しながら思考する環境を設ける

立てた問いに答えを出す際、自身が既にもっている情報のみで答えを出すと、どうしても浅

薄な答えに終始し易くなる。学生が他者との協働的な相互作用の中で、建設的に思考し、より深い認識に基づく答えを作り出していく為の環境を設定していきたい。

(3)理念3 学び続ける意義を伝える

折角作り上げられた答えも、それを絶対解として固定化してしまうと、思考はそこで途切れてしまう。しかし、答えはあくまでも納得解であり、一時的な結論に過ぎない。他者との更なる相互作用の中で、互いの結論は更新され続けていく。学びのサイクルの構築を通じて、授業内で理解を終えず、絶えず学び続けていくことの意義を伝えていきたい。

尚、上記の3つの理念はいずれも、「他者と協働的に事象を吟味することを通じて学び続ける意義を伝える」に繋がるが、当然のことながら、私の教育理念全体を3つに分割したのではないし、この3つが教育理念全体を完全に包括したりはしない。

4. 教育の方法

(1) 学生の価値観を揺さぶる視点の提供

「理念1」に関して、授業内において、学生が「当たり前」だと考えがちな事象に対して、別の側面が見え易くなる視点に基づく話題提供を積極的に行っている。学生の固定観念を揺らがせることで、事象の吟味の必要性に気づかせることと共に、問いの立て方の例示をも兼ねられることを期待して実施している。その際、学生の驚きによる心的負担を軽減する為に、初回授業での説明に加え、直前にも可能な範囲で予告をする等の方法をとっている。

(2) 他者の思考に触れる機会の提供

「理念2」に関して、授業内において、学生が他者の意見を参考にしながら自身の意見を作り上げられる様な、相互作用関係の場面づくりを行っている。具体的には、slidoやGoogleスライド等のインターネットサイトやアプリケーションを利用して、他者の意見を可視化できる環境を用いている。

(3) 理解を深め続ける為の授業サイクルの導入

「理念3」に関して、授業内において、学生が学んだ内容は絶えず「その時点における理解」であり、情報が加わることで理解が深まり、時に解釈自体が更新されることを実感できる様に授業デザインを行っている。具体的には、あるテーマに対して「ICT機器を利用した情報収集」を通じて簡潔な理解をさせた上で、続いて「授業内の解説や議論」を通じてその理解を深めさせる。授業後には「学生からのコメントへの返信」を行うことで、個に応じた更なる理解を促す。そして次回授業の前半では「一部コメントの全体共有」と「授業の補足」を行い、更に理解を深めることを促す。以上を1セットとして授業を行うことを基本としている。

5. 教育改善のための努力

(1)改善努力1 授業に関する要望の出し易い雰囲気づくり

授業とは授業者・学生が協働的に作り上げていくものである。授業評価アンケートで事後的に要望を受けたとしても、それは要望を出した学生の声に直接応えたことにはならない。その為、授業期間中に、記名・無記名を選んで学生が要望を出せる環境を設定している。

(2)改善努力2 授業の論拠の説明

授業に関して、何故そうしているのかの説明が不足すると、学生の不安や不満に繋がりが易い。その為、努力1の内容に加え、可能な限り授業内で授業者の言動の意図について説明する様に尽力している。

6. 教育の成果・評価

2024年度後期担当科目においては、単独で担当した科目である、カリキュラム論【幼小】・カリキュラム論【中高】・道徳教育の理論と実践【小】・道徳教育の理論と実践【中】・哲学の5つ授業評価アンケートにおいて、「【1】この科目について感じたことや思ったことをお答えください。」の各10項目、合計50項目中49項目で、5段階中4以上の肯定的な結果が得られた。

7. 今後の教育に関する課題と目標

社会の変化に対応する教員を育成していく為に、「他者と協働的に事象を吟味することを通じて学び続ける意義を伝える」ことを引き続き自身の課題及び目標としていきたい。その為に、児童教育専攻の先生方と協働し、学生が主体的に学び活動できる環境の設定を更に推進していきたい。大学内の学びが机上に留まらぬ様、学外での学びの場を提供し、学生の体験が思考を通じて充実した経験になる様、積極的に支援していきたい。

【根拠資料】

・担当科目シラバス

教育原論、カリキュラム論、道徳教育の理論と実践

・2024年度後期授業評価アンケート

カリキュラム論【幼小】、カリキュラム論【中高】、道徳教育の理論と実践【小】、道徳教育の理論と実践【中】、哲学